

レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」

勝 山 貴 之

奨励者紹介[かつやま・たかゆき]

同志社大学文学部教授

[研究テーマ] 英米演劇・映画研究

夕方になると、イエスは十二人と一緒に食事の席に着かれた。一同が食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」弟子たちは非常に心を痛めて、「主よ、まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。イエスはお答えになった。「わたしと一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が、わたしを裏切る。人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」イエスを裏切ろうとしていたユダが口をはさんで、「先生、まさかわたしのことでは」と言うと、イエスは言われた。「それはあなたの言ったことだ。」

(マタイによる福音書 26 章 20—25 節)

様々な画家による「最後の晩餐」

新約聖書の4つの福音書には、イエスが十字架にかけられる前日に12人の弟子たちと晩餐を共にしたことが記されています。この場面は、多くの画家によって、作品の題材として繰り返し描かれてきました。本日のチャペル・アワーのメッセージとして、西洋美術の研究家である高階秀爾氏の研究をもとに、画家たちの「最後の晩餐」の描き方、特にレオナルド・ダ・ヴィンチの描き方に注目して、お話をしたいと思います。

14世紀の画家ジョット・デ・ボンドーネは、パドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂の壁画を制作するにあたって、この「最後の晩餐」(1304~05年頃)という題材を選んでいます。ジョットの作品には、イエスと共に席についた12人の使徒の姿が描かれています。場面の中では、イエスを囲むように使徒たちが座っているため、手前に座った使徒たちは背中しか描かれておらず、それぞれの表情はわかりません。イエスと使徒たちの頭には光輪が描かれていますが、左端から2番目に座っている人物だけに光輪がないことから、この人物こそがユダであることがわかります。

15世紀に前半を生きたアンドレア・デル・カスターニョもまた、フィレンツェの旧サンタポッローニア修道院の食堂に「最後の晩餐」(1447年)を描きました。カスターニョの壁画では、イエスを中心に、その左右に11人の使徒が描かれ、ユダだけがテーブルの手前に座っています。このように座る位置を変えることで、ユダを他の弟子たちと区別するという手法がこの時代には採用されました。15世紀の後半に活躍した人気画家ドメニコ・ギルランダイオも、「最後の晩餐」という同じ主題で3つの作品(1476年、1480年、1486年)を残していますが、いずれの作品においてもユダは、他の弟子たちから離れた位置に、すなわちテーブルの手前にひとりだけ座らされています。ギルランダイオと同時代に活躍したコジモ・ロッセリも、彼の「最後の晩餐」(1481~82年)でユダを手前に座らせるという構図を踏襲していること

から、こうした描き方が当時は一般的であったことがわかります。そればかりかロッセリは、ユダの右肩に小さな悪魔を描くという工夫までして、裏切り者ユダの存在を強調しています。

ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」

レオナルド・ダ・ヴィンチは、ミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院の食堂の壁画として、この題材を選んでいました。制作は、1495年から1498年にかけて行われ、「最後の晚餐」はレオナルドの作品の中でも傑作とされているもののひとつです。

当時の壁画は、一般にフレスコ技法によって制作されていました。フレスコ技法は、漆喰が生乾きのうちに、水溶性の絵の具を用いて描くことから、絵の具が壁と一体化します。これによって作品は、時の経過を経ても保存状態が良くなります。しかしこの手法は、重ね塗りや描きなおしができません。時間をかけて絵を描くことを好んだレオナルドは、「最後の晚餐」にフレスコ技法を採用しませんでした。代わりに乾いた漆喰に乳化作用を持つ固着材を使用するテンペラで描くことを選んだのです。西洋絵画では、よく用いられてきたテンペラですが、漆喰の壁には馴染まなかったようで、完成後の痛みが激しく、16世紀から19世紀にかけて、後世の画家たちによって何度も修復が試みられました。しかし後世の画家たちの修復作業には随分いい加減なものもあり、レオナルドの制作したオリジナルとはかけ離れたものとなっていきました。そればかりか自然災害も影響したようで、壁画は二度も洪水にあっています。また第二次世界大戦の際には、空襲で建物が破壊され、壁画は3年間も風雨に曝されることとなってしまいました。

1977年から実に20年以上の歳月をかけて行われた修復作業が1999年に終了しました。修復作業は、ほぼ美術修復家のピニン・ブランビツァひとりによってなされました。縦4m横幅9m程もある大きな横長のこの作品は、遠近法によって描かれています。修復作業の際に、イエスのこめかみに釘の穴があることが見つかり、これが遠近法の奥行き消失点となっていることがわかりました。壁画に描かれた構図は、イエスを中心に据えて、観る者を「最後の晚餐」の世界へと誘い込むよう仕組まれているのです。更に、壁画に描かれた天井や壁が、実際の食堂の壁や天井と繋がっている点も重要です。壁画は修道院の食堂に描かれていますから、食堂の最も上席に座ることとなる修道院長から観れば、「最後の晚餐」の場に、自分もまた臨席しているような感覚を呼び起こさせるものであったでしょう。イエスの背後には開かれた窓が描かれており、そこから差し込む光とイエスの頭上に描かれた半月形の装飾リュネットが、イエスの光輪の役割を果たしている点にも、レオナルドの工夫が見られます。

最も重要な瞬間

新約聖書の「最後の晚餐」の場で最も重要な瞬間といえば、イエスが12人の弟子に向かって、この中に私を裏切ろうとする者がいると予言する場面、あるいはイエスがパンを取って弟子たちに分け与え、これがわたしの体であるとし、葡萄酒を与えて、これはわたしの流す契約の血であると語る場面です。画家にすれば、どちらも晚餐の席を描くに当たって、ドラマチックな題材となると思われます。果たしてレオナルドは、どちらの瞬間を彼の壁画の題材に選んだのでしょうか。修復作業の結果、イエスの口元が少し開いていることが明らかになりました。レオナルドの「最後の晚餐」は、まさにイエスが、弟子たちにこの中に裏切り者がいると告げた瞬間を描いたものであったことがはっきりしたのです。

イエスの口にした裏切り者についての予言に、弟子たちは驚愕します。壁画の中では、イエスを中心に12人の弟子たちは左右6人ずつ配置され、更に3人ずつがグループになるよう構成されています。イエスの右手には、右端からシモン、タダイ、マタイのグループ、その横にピリポ、トマス、大ヤコブのグループ。そしてイエスの左手には、左端からバルトロマイ、小ヤコブ、アンデレのグループ、続いてユダ、ペテロ、ヨハネのグループです。ユダは、視線をイエスに向けていますが、身を引くかのような姿勢で、その顔は影の中に沈むかのような描かれ方です。その右手には、裏切りの報酬であるかのように、金袋がしっかりと握られています。レオナルドは、従来の画家たちのようにユダだけを他の弟子たちから離して描くようなことはしていません。むしろ、驚く他の弟子たちとは対照的にユダの顔つきや姿勢からは、怖れからことばを失ってしまった様子が窺えます。ユダは、イエスがすべてを見通していることに畏怖を感じ、同時に自分の心の中まで見透かされていることに狼狽したのでしょう。

晩餐の一瞬を捉えたレオナルドの構図には、イエスの予言に対する弟子たちの動揺とざわめきの様子が表現されています。イエスは弟子たちに向かって、「あなたがたのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」と告げます。作品は、このイエスの発言が弟子たちにもたらした衝撃を描いているのです。驚いた弟子たちは、口々に「主よ、まさかわたしではないでしょう」とイエスに問いかけます。レオナルドの描いた構図を注意深く見ると、イエスの左右に描かれた弟子たちの動きは、イエスに近いグループが比較的小さな動きをしているのに対して、イエスから離れた場所に座っているグループでは大きな動きをしています。ちょうど水面に投げられた小石が波紋を広げるように、イエスのことばの衝撃が画面の中心から周縁に広がっていることがわかります。そうした弟子たちの驚きのしぐさの中でただひとり、畏怖を感じているユダの表情や姿勢の描き方におけるみごとな表現。他の誰ともことばを交わすことなく、ただ凍りついたようにイエスを見つめている彼の姿に、私たちは神の子イエスを売ったユダの罪深さを思い知らされることとなります。

他方、弟子たちの動揺とは、対極をなすかのようにイエスは静かに、伏し目がちな様子で、この恐ろしいことばを伝えています。イエスが両手を広げて座っていて、三角形という古典的な均衡を守った形で描かれていることから、壁画の中心にいてこの場を支配する存在として描かれています。

ダ・ヴィンチの素晴らしさ

高階秀爾氏は、このレオナルドの「最後の晩餐」を解説するなかで、絵のもつ静寂感に触れて次のように語っています。

使徒たちの激しい感情の乱れと喧騒にもかかわらずこの絵に広がっている静寂感。それは全人類の罪を贖い救済するための犠牲となって明日には磔刑に処せられる自らの定めを自覚したイエスの内面に広がる静寂感ではないでしょうか。そして、その静寂感こそは、彼の心が人類への愛に満たされていることの表れにほかならないでしょう。

(※186—87頁)

まさにレオナルドの「最後の晩餐」の素晴らしさは、ここにあると思われます。新約聖書の一場面を描き

ながら、その場面を通してイエスと12使徒の姿ばかりか、その内的心情を見事に捉え、一瞬の動作を静止画として見せることにより、神の子イエスの人類への愛を観る者の心に訴えかけるレオナルドの驚異の技こそ、後世に名作傑作として語り継がれる理由なのでしょう。ルネッサンスという時代の中で、卓越した才能を見せつけるレオナルドの画力をあらためて称賛したいと思います。

〔参考文献〕

※高階秀爾 『レオナルドの「最後の晩餐」はなぜ傑作か？—聖書の物語と美術』 小学館 2014年

2024年1月10日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録